

## Program Notes

山田 武彦(ピアニスト)

カール・シマノフスキ

### 歌曲集《スウォピェヴニェ》 Op. 46 詩：ユリアン・トゥヴイム

ポーランドの作曲家K.シマノフスキ(1882-1937)の初期の作品には後期ロマン派や印象主義的な様式が取り入れられる一方で、祖国の音楽性の表現に対するアプローチが特に1920年以降に顕著にあらわれる。それ以前にも古代ギリシャを思わせるビザンチンやイスラム、オリエントの音楽的要素が見られたが、歌曲集《スウォピェヴニェ》(1921)やオペラ《ロジェ王》(1918-24)が書かれた頃からはポーランド南部・山岳地帯のゲラル人の音楽の要素が取り入れられた。狭い音程で揺れ動く旋律線や空虚5度、変拍子などの音楽的特徴を独自の方法で再構築する。

ユリアン・トゥヴイム(1894-1953)は20世紀ポーランドを代表する詩人で、彼の連作詩集をテキストにこの歌曲集が作曲されている。この詩集で使われる言葉は非常にユニークで、例えばタイトルの「スウォピェヴニェ」という語はポーランド語にはないという。「言葉」「歌」などの語を組み合わせてトゥヴイムが編み出したものであり、詩集の語句中の半数以上にこのような造語が用いられ、スラヴ語の原型を通じておおよその意味がわかるものの、むしろ言葉のリズムによって音楽的になるように詩・曲が紡ぎ出されている。

モーリス・ラヴェル

### 歌曲集《2つのヘブライの歌》

20世紀前半に活躍したフランスの作曲家M.ラヴェル(1875-1937)は独自の大掛かりな作品のみならず、ギリシャ、スペイン、イタリア、スコットランド、ロシアなど世界各地の民謡を題材とした編曲作品も手掛けている。1914年、第一次世界大戦勃発後、彼が看護兵として従軍する直前の6月に《2つのヘブライの歌》が作曲された(従軍後も作曲は続けられ、組曲《クーブランの墓》などが生み出されることになる)。

1曲目の「カディッシュ」はアラム語のテキストに基づく荘重な詠唱のスタイルで唱われる葬送歌であるのに対して、2曲目の「永遠の謎」ではユダヤ民謡が基となり、拍節もよりわかりやすいものとなっている。ここに聖と俗とのコントラストが表されることになる。民族独特の特徴的でエキゾチックな旋律とラヴェル独自の現代的なアプローチとの混合が新しい音楽様式を生み出している。

リリ・ブーランジェ

### 歌曲集《空の広がり》

詩：フランシス・ジャム

フランスの女性作曲家L.ブーランジェ(1893-1918)は音楽一家に生まれる。祖父はチェリスト、祖母は歌手、父は若くしてローマ大賞を受賞したオペラ作曲家、そして姉のナディアは20世紀最大の著名な音楽教師となる。リリは早くから神童ぶりを発揮し、家族と付き合いがあったG.フォーレに幼少期からピアノを教わり、16歳でパリ音楽院作曲科に入学、もともと病弱で臓器に障害があり、気管支炎等を患いながらも姉ナディアの支えもあり1913年女性として初めてローマ大賞を受賞する。

歌曲集《空の広がり》はローマ大賞受賞後旅行中のローマで着手された。テキストはフランシス・ジャム(1868-1938)の長編「悲しみTristesses」から抜粋されたが、歌曲集全体のタイトルとして「空の広がり(空のひらけたところ・晴れ間)」を採用した。全13曲を通して、ある少女との恋愛の成就と失恋が表されているところから、「詩人の恋(シューマン)」や「美しき水車小屋の娘(シューベルト)」などと比較して語られることがある。

リリの声楽曲作曲家としての才能について特筆すべきは言葉と旋律線の抑揚・リズムとの関係が非常に美しいことと、ドビュッシーのそれを思わせるような調や響きと予想外とも言える前後の繋がり方の妙であろう。聞き手は《空の広がり》の切ない物語を追っていきながら美しい響きを存分に楽しむことになろう。

#### 2023/2024 Season 主なスケジュール

《こうもり》 (野村萬斎 演出)	11月19日(日)	びわ湖ホール
	11月25日(土)	東京芸術劇場
読売日本交響楽団 ベートーヴェン[第九]	12月15日(金)~24日(日)	大阪・横浜・東京
NHKニューイヤーオペラコンサート	2024年1月3日(水)	NHKホール
森谷真理 ソプラノ・リサイタル	2024年1月8日(祝・月)	栃木県文化会館
《椿姫》	2024年1月28日(日)	やまぎん県民ホール
《ばらの騎士》	2024年3月2日(土)	びわ湖ホール
森谷真理 ソプラノ・リサイタル	2024年5月26日(日)	宗次ホール(名古屋)
	2024年5月31日(金)	王子ホール

# 森谷 真理

## ソプラノ・リサイタル Vol.2

Spirits of Language ~言葉に宿るもの~

ピアノ：山田 武彦

### プログラム 日本語歌詞訳

#### カロル・シマノフスキ

#### 歌曲集《スウォピェヴニェ》Op. 46

詩：ユリアン・トゥヴィム 訳：関口 時正

##### 1. ことさくら

白樹に昼ひかざらひ、  
蜜にこがねてしらは燃ゆゆた、  
みつ峰にはち巢みつら樹、  
葉ごしに赤々とさくらごつ房。

鎌月のまそらにぎからめば、  
かげ暗がりには歌なごりのみ、  
白樹にちろちらとしかねか、  
甘ことりことのさくらごつのみ。

##### 2. あをき言の葉

また林のきはに林きはあれば、  
そこは繋ぎ行 李柳さやぎてか。

みぎは森、ひだり青草、  
やれ歌へるむらくさにてもひろらか。

むらくさにみづゆき、みづ逃ぎ、  
はらなかををがはながれぞめき。

みぎには森、梢ばやしき黒森、  
ひだりはみづのはのあをほのあをり。

ひそはらをうねり、むらくさになるとは、  
彼處にても朗かに嘶くかのむらくこの馬。  
おう!

##### 3. 聖フランチェスコ

鳥どち花どち  
牝鹿どもよるこび  
百合ルヤハレルヤ  
百合ルヤハレルヤ  
福音ヤ。

福音ヤ天使ヤ  
福音ヤ天使ヤ  
世に呼ばへり—  
《ワレラ知ラズ!》《ワレラ称フ!》  
みな哭けり。

天つ人、野の人  
やさしきかがやき  
イエスよ鳩よ  
愛よ!

##### 4. ガマズミの館

ガマズミの館、  
カチカヘデにほの照れ、  
なまめけるナナカマデ、  
籠り戸にあからけ!

あからけ頬の実、  
モウズイカによばへ!  
森づたひにはかなはね、  
カチカヘデいらつめ!

兄御ここをわたり、  
焼くほどに閃めき、  
やれ、美しく燃えおる  
ガマズミの館!  
おう!

##### 5. ヴァンダ

ヴィスワのみづやヴァンダや  
しろかねの底ひいはをや  
くらしづみ爪もて  
青そこひ僧月はこぶ。

あをあをながれて底うたひ  
ルーシルサルカみづやヴァンダや  
ひかりたぶる髪くしげづり  
くすしくひめもやみづ死ぬるや。

#### モーリス・ラヴェル

#### 歌曲集「2つのヘブライの歌」

訳：鳥木 弥生

##### 1. カディッシュ

御身の栄光が 称えられますように  
王の中の王よ  
世界を新しきものにし 死者を復活させる御方  
あなたの統治が我々イスラエルの子らによって  
今日も 明日も 永遠に宣言されますように  
我々は唱える アーメン

御身の輝ける名が 愛され 慈しまれ  
褒め称えられ 讃美されますように  
我らの賛辞と讃歌と祝福の上 天高く  
御身の名が舞い上がりますように  
祝われ 崇められ 慕われますように  
慈悲深き天が我々に  
安らぎと 平和と 幸福を与えてくれますように  
我々は唱える アーメン

##### 2. 永遠の謎

世界よ 汝は我らに尋ねる  
トラ ラ トラ ララララ…  
人々が答える  
トラ ラ ラ…

もし人々が  
トラ ラ ラ…  
を 知ることが叶うのなら  
世界よ 汝は我らに尋ねる  
トラ ラ ラ…

#### リリ・ブーランジェ

#### 歌曲集「空の広がり」

詩：フランシス・ジャム 訳：鳥木 弥生

##### 1. 彼女は野原を谷間へと降りていった

彼女は野原を下っていった  
彼女は野原を低い方へ下っていった  
そこでは一面に 水場を好む草花が咲き誇っていたので  
その水に浸かった花々を僕は摘んだ  
やがて濡れそぼった彼女が上がってきた  
そこもまた花盛りの野原へと  
彼女は笑って  
背の高い女の子たちがよくやる  
ぎこちなく優雅な仕草で  
身を震わせ 水をはらった  
彼女の眼差しは  
ラヴェンダーの花

##### 2. 彼女はおそろしく快活だ

彼女はひどく陽気だ  
彼女はひどく陽気だ  
時折  
僕の考えを見透かすように  
瞳が閃くけど 夜になると  
バンジーの小道の黄色と青の絨毯みたいに  
彼女は優しくなったんだ

##### 3. 時々ぼくは悲しくなる

僕はたまに悲しい  
僕はたまに悲しい  
だから  
ふと彼女を想う  
そうすれば  
僕は幸せ  
でも  
また僕は悲しくなる  
どれくらい愛されているかが  
僕には分からないから  
彼女は晴れやかな若い娘で  
その心には 大事に秘めている  
一人の男性に捧げる  
一途な情熱を  
彼女が去ったのは菩提樹の咲く前だった  
菩提樹は彼女が去ってから咲いたのだ  
僕は驚いたのだ  
おお  
友よ  
その菩提樹の枝に  
花はなかった

#### 4. ひとりの詩人がこう言った

詩人が言った  
彼が若い頃には  
薔薇の木に咲く薔薇のように  
詩に花を咲かせたと  
僕が彼女を想うとき  
心に感じるのは  
さわさわと  
つきることなく  
湧き出る泉  
神は百合の花を教会の香りにそめ  
さくらんぼを珊瑚の色にそめた  
僕は全身全霊を込めて  
彼女をそめた  
呼び名も持たない  
香りの色に

#### 5. ぼくのベッドの裾のところに

僕の寝床の足元に  
母が  
黒い聖母の絵を置いた  
僕はこの  
ちょっとしたイタリ風宗教画の  
マリア様が好きなんだ  
金色の背景に立つ月桂冠のおとめは  
そよりとも風の吹かぬ波止場の  
うつらうつらとした屋台で売られる  
たぐさんの海の幸を思わせる  
月桂冠のおとめよ  
僕は近頃 感じるんだ  
彼女に愛される価値がないって  
僕の心をあなたの香りで元氣付けておくれよ

#### 6. もしこのすべてがただのくだらない夢で

もしも全てが 哀れな夢ならば  
そして  
僕の人生の幻滅に  
もう一つの幻滅を付け足すだけなら  
もしも  
僕の薄暗い狂気を通して  
雨風の優しさの中に求められるのが  
ただ  
僕の情熱に潜む  
虚しい声だけなのだとしたら  
ああ 恋人よ  
僕に  
回復の見込みはない

#### 7. ぼくらはお互い深く愛し合おう

今度会うときには  
たくさん愛し合おう  
手を取り合い  
言葉も出ないほどに  
いつものベンチに二人で座ろう  
古い細枝は  
あなたに木陰を作るだろう  
僕たちは二人だけで腰掛けよう  
とても長い時間.....  
ああ 恋人よ  
あなたが僕に.....  
優しくしてくれるだろう  
そして  
僕は身震いするだろう

#### 8. あなたはぼくを見た、あなたの魂すべてで

あなたは魂の全てで僕を見つめた  
あなたは僕を長い時間  
青空のように見つめた  
あなたの視線を僕は  
僕の瞳の陰におさめた.....  
その視線の  
情熱と平穏を.....

#### 9. 去年咲いていたリラの花は

去年咲いていたリラが  
悲しみの花壇に  
再び咲く  
桃の木は  
聖体祭の日の子どものように  
その花びらを青空に  
山と降らせる  
僕の心はこの風景の中で死ぬべきだった  
僕が狂おしく君を求めたのは  
白と紅の果樹園の中だったのだから  
まだ密かにあなたの膝の上で  
夢を見ている僕の魂を  
押し退けないで  
起こさないで  
あなたから引き離され  
見失わないように  
あなたが僕の腕の中で  
どれほどに弱々しく  
打ち震えたのかを

#### 10. 二本のおだまきの花が

二本のおだまきの花が  
丘に揺れていた  
一本のおだまきが恋人のおだまきに言った  
「君の前だとドキドキして プルプル震えてしまうんだ」  
もう一本のおだまきは答えた  
「一滴一滴としたる水に磨かれた岩肌にも  
もし私を映したなら  
同じようにドキドキしてプルプル震えている  
私が見えるはず」  
だんだんと激しく吹く風が二本を強く揺らし  
その青い心を愛で満たし 一つにした

#### 11. ぼくが苦しんできたことは

僕は苦しんだから  
僕の祝福された小島よ  
僕の片割れも苦しんだことを知っている  
あなたが一晩中眠れなかったことも  
あなたの胸に  
僕の苦しみが詰まっていることも  
時折感じるのだ  
おお  
花咲く亜麻の娘よ  
その花のように空を見上げ  
信頼に満ち率直な  
愛しいこうべが  
夜に傾くように  
その重みが全て  
永遠に  
僕の人生にもたれかけられるようだと

#### 12. ぼくは彼女のものだったメダルを持っている

僕は彼女のメダルを持っている  
そこに日付とともに刻まれる言葉  
「祈り 信じ 望みたまえ」  
でも僕にとって  
そのメダルの輝きは鈍い  
彼女の白鳩のような首にかかり  
銀色がくすんだのだ

#### 13. 明日でちょうど1年になる

僕が最初に話した  
オドーの湿原で花を摘んだ日から  
明日でちょうど1年になる  
復活祭の週の中で  
一番 晴れた今日  
僕は里の青空の下  
森を越え  
草原を越え  
畑を越えて  
突き進んだ  
いったいどうやって  
僕の心よ  
お前は一年も  
死なずにいられたのか?  
心よ  
僕はお前に苦しみを与えた  
あんなにも辛い思いをした村を  
司祭の家の前で血を流す薔薇を  
悲しみの花壇で僕を殺すリラを  
再び目の当たりにさせたのだ  
僕は苦境の頃を思い出す  
いったいどうやって倒れずにいたのだ  
額を埃まみれにし  
あの小道の赤土の上に  
無だ  
何ひとつ持たず  
何にも支えられず  
なぜ晴れているのだ?  
なぜ僕は生まれてきたのだ?  
疲れに引き裂かれ  
道端の溝にいる乞食のような僕の魂を  
あなたの穏やかな膝の上で癒したかった  
眠りだ  
眠るしかない  
永遠に眠るのだ  
青い夕立の下で  
冷たい雷鳴の下で  
もう何も感じない  
もうあなたの存在を想うまい  
もう見まい 大気と水を混ぜ合わせる青い幻惑の  
紺碧が丘を飲み込む  
虚しくあなたの姿を探した  
あの空も もう見まい  
僕の心の底で  
そこにいないはずの誰かが  
重く静かに咽び 涙を流しているような気がする  
僕はただ記す 里に喜びが響き渡る中  
「彼女は野原を低い方へ下っていった  
そこでは一面に  
水場を好み草花が咲き誇っていたので.....」  
無だ 何ひとつ持たず 何にも支えられず